鶴岡市総合計画審議会 第２回産業専門委員会　（会議概要）

○ 日 時　平成３０年５月３０日（水）午後３時から午後４時５０分
○ 会 場　鶴岡市役所 ３階 委員会室
○ 委員発言の概要

A委員長
・説明があった９つの着眼点に関連した現状課題、施策の方向について事務局から資料にまとめていただいたので、これを参考に委員の皆さんのご意見を伺いたい。

B　委員
・９つの着眼点については、一つ一つバラバラに存在するのではなく、これが有機的に繋がってはじめて地域なのではと感じた。
・社員の人づくり、投資を呼び込んで色んなものを作ったり、交流人口を増やしたり、そのために地域の文化資源をどう表現していくのかという課題もある。今は、環境省と循環型のエネルギー問題にも取組んでいる。
・インバウンドを踏まえた国際化へのシフトも課題になっている。
・コンパクトとネットワークという項目について、自社では、人がいなくなってきている中で、会社自体をコンパクトにし、地元に住み、関わっている人だけで完結できる仕組みにしながら、地元に居なくてもいい業務はネットワーク化して全て外注化しようとしている。予約業務は在宅の主婦の方々をネットワーク化して東京で行っている。
・鶴岡全体も大切ではあるが、自らの地域からしっかり考えていかなればならない。当地域では、縦割りにならないよう地域をマネージメントしていくための会社を新たに立ち上げ、取組んでいる。
・鶴岡はかなり広く、それぞれの地域が個性をもっている。コンパクトな地域がネットワークでつながることで鶴岡の個性を作っていくものだと考える。

C　委員
・現在、鶴岡の人口が１４万人。以前、２０５０年には１０万人を切ると聞いた。
・（事務局）：研究所推計では２０４０年で９万４千人、将来望む人口は１０万５千人である。
・推計値と目標値の差が１万人。どこからか連れてこないと目標とする１０万５千人にはならない。
・日本全国、働き手不足で人がいない。農業も同じで、以前の農業は春作業だけが忙しかったが、今は、春だけでなく１年を通して人材が不足している状況。しかし、農業だけでは通年雇用できないという厳しい問題がある。それを鶴岡の商工農で外部から

の雇用を維持する取組み、よそから来た若者やリタイアした方が永住する取組みができれば、人口減少対策にもつながる。

・２８年度のＵターン就農者９名とある。一方で、２９年度にリタイアした農業者は１００名ぐらいと現場でイメージしている。どこからか人を連れてこないと農業自体が衰退してしまう。

・アメリカの農業は、移民（メキシコ人）が、１月に西海岸でのオレンジの収穫が終わると、オレゴン、ワシントンへと移動し、１２月にリンゴの収穫が終わり南に帰っていく。彼らがいないと農業が成り立たない。優秀な移民はそこに永住する。日本でもサトウキビ工場で働いた人が、山形でサクランボを収穫し北海道に移る JA の取組みもあり、これを鶴岡に留めておくことも考えなければならない。

・鶴岡で生まれたから鶴岡に骨をうずめるという人は少ないので、皆で知恵を出して、どこからか人を連れてくるような取組みを考えなければならない。人口減少対策にもつながるし、産業面でも労働力確保にもつながると思う。

D　委員

・チャレンジショップや安く店舗を借りて新しく起業されている方々をよく見かける。ある程度期間が経ったあとの状況も調査すべき。

・国際社会や国際都市を目指す上で、外国の方が鶴岡市を訪れようとした時に、英語での情報が無いという声がある。市のホームページの英語化率を数値目標として設定し検証することもできる。

・起業や新規出店された方々を応援する意味でも、新しいものに対して市民のマインドをくすぐるような施策を考えることが必要。

・新しく事業を始める場合の開店資金に対して支援する仕組みがあると良い。

E　委員

・鶴岡市では人口減少がどの分野においても一番ネックになっている。鶴岡に戻りたくなるような、住みたくなるような構想や施策が必要。鶴岡で就職をしたい、農業をしたいと思うような構想がないと、人口減少の歯止めにつながらない。若年層、子どものうちからの何らかの仕掛けが必要と考える。

・鶴岡の魅力をどういった形で発信し、最終的には定住してもらうという形のものがつくれないか。

・農業においても農地が荒れている状況もあり、どう保全していくのか、また、高齢者も多くなっているので、新規就農者や若い農業者をどう誘導していくのか課題。

F　委員

・産業といえば選択と集中、「期待の持てるところには投資を集中させる」ということで、企業であればそうだと思うが、これが、市のこれからの１０年の施策を考える場

だとすれば、それでいいのかと着眼点を見て思った。例えば、国が、外国の富裕層をターゲットとして、観光収入を上げようという動きもあるが、出羽三山に来る方は、デイパッカーとかあまりお金をかけない外国の方が多いため、そういう方々に富裕層向けの対応をしても意味がない。これから観光振興や産業振興を考えた場合、行政があることに集中すると、一方で、見逃されてしまう業種や個人が出てくることが問題と思っており、行政はそういうところにも手当していかなければならないと思う。

・観光資源のパンフレットが数多くあるが、ほぼ内容は同じである。例えば、鶴岡の食文化といえば、蕎麦や麦きりはパンフレットに出ているが、市民が日常的に食べているラーメンは出ておらず、多くの店、利用者がある一つの分野が、行政的には見落とされていると思う。

・鮭川村では「トトロの木」を前面に観光ＰＲしているが、村だからこその取組みで、鶴岡市であれば見向きもされない感じもある。まちが大きくなって、大きな観光資源があるため、小さな、あるいは可能性のある資源が見落とされていると感じている。地元で観光事業を行っている目線では気づきにくいこともあるため、これから発掘して磨き上げたら伸びるものは何か、ＵＩＪターンされた方や、外国人、旅行者等の目線も必要と感じている。

Ｇ　委員

・若者が定着して子供を産まない限り、人口は増えない。何をすれば若者がこの地域に住み、子供を産むようになるのかを出羽商工会青年部でも検討している。

・鶴岡の中小企業の 9 割近くは小規模事業所である。小規模事業所が減っていては、鶴岡の商売は成り立たない。経営を継続し承継していくことが課題。中小企業の人材不足は非常に厳しい問題である。

・中山間地域での新規農業者は 1 名となっている。私も離農者の農地を引き受けているが、中産間地域で農業を続けられる政策があっても良い。

Ｈ　委員

・県漁協でも平成 22 年頃から、新規就業者を増やそうということで、国、県の事業に取組んでいる。鶴岡市も一本釣り漁業に対していち早く事業を作ってくれたが、関東圏の方から新規就業したいという話が来ているが、宿泊できる研修施設がないなどの不具合もある。

・釜石も、鶴岡市と同じように、関東から受け入れても泊るところがないという問題があった。

・山形県の単独事業として、新規就業者に対する船の購入に対する補助事業を作っていただいたが、規制緩和により近年は船が大きくなっている中、岸壁は小さな船に合わせたままとなっているほか、漁港の巻き上げ施設は昔のままであることから、巻き上がらない由良や鼠ヶ関の船が酒田に行ったりしているなどの問題もある。

・魚という点では、鶴岡市は、庄内おばこサワラ、紅エビ、鼠ヶ関のエビ、トラフグ、海藻類、サザエ・アワビ・岩ガキ等の貝類とか、非常に優れたものを持っているが、多くありすぎてぼやけなければいいなと思っている。
・インバウンドの話もあったが、外国人観光客のほか、関東圏、北海道から観光客が来ている。その人たちを日帰りでなく、足止めするためには、食べ物であれば湯野浜温泉などと協力するなどし、鶴岡のどこそこに行けば必ずこれを食べられるというような施策が必要である。
・鶴岡の底引き網船は、例年だと 120 日くらい操業するのが、平成 29 年度はシケのため 90 日も出ていないため観光客に対して地場の物が提供できない状況となった。県漁協では、県単独事業でリキッドフリーザーを購入し、旬のものを急速冷凍し、シケの時に食べさせようという取組みを開始した。
・観光の面では、三瀬、堅苔沢、由良に定置網漁業がある。〇〇旅館は体験漁業をさせて好評だと聞いているが、酒田市民から漁協に問合せがあるなど、コマーシャル不足だと感じている。
・山形市内に漁協がアンテナショップを持ったが、「あなたたち、売り方、コマーシャル下手よね」と言われてショックだった。県、鶴岡市、漁協の力の入れ方が足りないと思っている。私は、いろいろな対応案を持っているので、鶴岡市と一緒に考えていきたいと思っている。
・最後になるが、10 年後の鶴岡市を見たときに、人口の減少が一番なんだと思う。酒田市もそう。庄内を一括りにしたときに、大きなものは鶴岡市の観光であったり、漁業であったりするので、いろいろな場で言っていきたい。

I　委員

・中心商店街のにぎわい創出に向けて、市内の商店街が集まっているが、実際に集まる人は数名といった状況。商店街での食べ歩きツアーやお宝を見に行くツアーを企画している。
・数値目標は大事である。事後検証できるような専門委員会にしていきたい。
・「交流人口を増やす施策」と「コンパクト＋ネットワークによる自立分散型社会の実現」には興味があり、商店街としてもこれは必ず進めていきたいと思っている。
・高齢化が進み、商店街だけでは立ち行かなくなっている現状があり、専門委員会の農業や林業、水産業の方々と一緒にやっていきたい。

J　委員

・大きな問題が二つある。まず第一点が、生産拡大を進めようとしても生産してくれる方を中々発掘できない。労働力が減り、人がいないという非常に悲しい現状である。庄内はメロンの大産地であるが、日本の三大産地、九州や茨城でもどんどん作付が減っている。それも高齢化で、軽量野菜や葉物に変更する傾向で、メロンの需要は非常

に高いものの、生産拡大と言っていろんな手立てをしているが、中々一緒にやってくれる方を発掘できない

・二つ目は、村がなくなるという課題である。生産組合が機能していた時代では、集落機能がしっかりしていた。営農座談会をしても、次から次と村の話をして、地域を守るという姿勢が見られたが、今は受委託が進み、農業者がいなくなり、じいさん、ばあさんしかいない村が多くなり、集落営農をしてもリーダーがいない。若者は鶴岡の市内に家を建て、実家の周りが草だらけで誰も管理しない。これでは、交流人口を増やす施策の実施よりも、定着するための施策を優先すべきではないだろうか、というのが現状である。

・なぜそうなるか。農業は経済的満足度が弱いということ。どうしても冬場の所得をキープすることが大変苦しい。また、加工分野に回しても、加工原料は、驚く価格で引き取られるというシビアな状況である。

・それと精神的な満足度のないところには人は定着しないだろうと思う。周りが草だらけのところに、長男だから家に残って農業やりましょうと言っても難しい。

・自然と文化こそがオンリーワンであり、美田、棚田を守る、または森林を守る、美しい形を維持するということが心の、精神的な満足度につながるのではないか。産業も大事であるが、いわゆる社会の満足度、心の満足度という観点を深く考えて計画を作ってはどうかと思っている。

・ここに 9 つほど出していただいて、読めば読むほど難しくて、わからなかったが、ただ、4 番と、5 番と、9 番のフレーズには、本当に共感するところがある。

・循環という言葉があるが、やはり、経済の内部循環が必要であるだろうと思う。経済的な循環がしっかり構築できるようになればと思っている。

・前回の計画では成長戦略があった。鶴岡ルネサンス宣言ということで 5 つの文化都市をフレーズとして挙げており、非常にわかりやすくて、理想像として良かった。これについての評価、検証がどうなっているのか。後で、いつか教えてほしい。

・我々も振興運動計画を作っているが、大きな変化よりも、継続性の重要さを感じている。目標とする将来像は、いつになっても変わらないのではないか。「美をコンセプトとしたまちづくり」として、我々の農業振興運動計画も踏まえたところで、いわゆる、経済と両輪でいきたいという視点でやっている。

A委員長

・10 年の計画と言っても 20 年、30 年なりの一世代を超えたところを見据えつつ 10 年を考えなければいけないだろうと思う。全国統計予測から下振れをするのが傾向である。鶴岡が 2040、2050 年にどうなるのかということを意識しておくべきである。それを上振れさせるための施策を考えないといけない。

・新しい事、全く今までしたことがないことは難しい。鶴岡の人たちが得意としていること、日頃やっているもので、外部からの鶴岡イメージを考えたうえで経済循環が生

まれるものを考えてみるのもいいのではないか。例えば、食分野創造都市もキーワードにするなど。

・資料のまとめ方で思ったのが、まちづくりの重視したい着眼点を縦軸、各施策の方向を横軸と格子状に整理すると、重複や足りない所が見えてくるかもしれない。

C　委員

・鶴岡市の農業算出額は全国２６位とすごいが、人口減少するので 10 年後に何位になるか心配。

・輸出米をマレーシアに送っている。日本国内で売るより安いが、日本の人口が減るので、輸出米をこれからも増やしていくことは重要だと思う。可能性を海外に求めることもこれから必要なこと。それは個人ではできないことで、組織でしないといけないことである。農産物の輸出のサポートをしてもらいたい。

F　委員

・まちの価値を高めようと手を上げてくれるような、地域の方を巻き込んで観光振興を考えなければと思っており、見逃されているような観光資源を発掘するためにも、地域の方の視点を取り入れていく必要があると思う。

・様々な会議での話、観光の現場で個人が努力した成功例、また、失敗例もあり、いろいろな人たちで情報交換し、戦略を一緒に練っていく場、行政・地元・事業者などの立場から現場感覚で話ができる場、意見を吸い上げる場があればと思う。

・山間部の遠い場所など、マイカーでしか行けない観光資源は、外国人観光客や運転しない人からは見逃されてしまうことになり、二次交通が観光の多様性に決定的な意味を持っている。

D　委員

・わかりやすいことは大事なこと。この９つの着眼点を市民憲章に関連する順番に並べ直したらわかりやすくなるのでは。

G　委員

・出羽商工会では海外からの働き手を募集しており、今後、人材不足の課題が海外の働き手によって少しずつ改善されていくと思う。

・ユネスコ食文化創造都市として、他の都市にないオンリーワンのプロジェクト、ブランド力が鶴岡市にはある。

B　委員

・観光連盟では、地域とお客様の視点を客観的に調査し、そこから戦略を立てているが、鶴岡の認知度は低く、思いと現実のギャップを埋めていくことが重要。500 人への調

査では、羽黒山に行った人は 4、5 カ所周遊しているが、加茂水族館は一点目的型であること、食文化創造都市をとっているが、日帰り客の多くが市内で食事をしておらず、他市に流れている可能性が考えられる。客観性がないと合意形成がとれないため、データに基づいてこれから先の鶴岡の観光のことを考えていかなくてはならない。
・幸せの価値は何か、お金なのか、価値観が多様性しており、自分がどうありたいか、お客様がどう思うかというマーケティング、ブランディングを考えたい。

H　委員

・鶴岡市は高速道路で新潟とつながる。インターが出来ると商業施設が必要になるが、海の物を扱う県漁協は力にならなければいけないと、常勤の役員を交えて話をした。他市町よりも先にしっかりしたものを考えて作れば、鶴岡に対する集客が増える。
・食文化、水産流通に関係する部分で、酒田港に係留してある小波渡の第 38 正徳丸は、漁港から北海道まで、サケ・マス流し網漁業において無寄港で行って帰ってきたという歴史的にすごい話がある。第 38 正徳丸が無くなると潰えてしまうので、こういう漁業の隠れたところも紹介してほしい。また、由良地区にあったリヤカーで魚を売るアバさんが居なくなってしまった。山形県が庄内浜文化伝道師を作るのであれば、個人的な思いとしてはアバさんの文化を残してもらいたかった。
・海産物を販売するにあたって保健所の取り扱いが厳しい。鼠ヶ関の大漁旗フェスティバルや由良の大漁祭などでネックとなるのが保健所の対応。行政も漁協に任せきりということではないと思うが、しっかりとしたフォローが無いとイベントすら出来ない状況にある。
・鶴岡には優れた物、優れた人がいるので、宣伝下手と言われることが無いように、伝統歴史ということであればこれから先何百年も続くので、検討して進めてもらいたい。

J　委員

・企画専門委員会のほうで、まちづくりの基本方針とか基本政策、主要な課題を検討されたが、その内容を情報としていただきたい。我々の現場の課題とギャップがあるか、そういったものを盛り込んで方向を一緒にまとめ上げることが出来ればいい。
・10 年後に鶴岡はどうなるのかという簡単な青写真のようなものがあればいい。生産者 3,100 戸の組合員がいるが、シミュレーションの中でどうしていくか、現場に訴えるときにロジックに説明・検証ができる。
・鶴岡は、米、メロン、だだちゃ豆以外の農産物は消費地。自給圏を作るというプランを出して農協と行政がタッグを組んでやるとか、産直の先の話のことも内部循環という視点でものを考えるとか、鶴岡市や市場のデータを使って組み入れてみるとか、検討された情報を頂ければ我々も勉強になると思う。

I　委員

・経済の循環という市民が地域にお金を落とす仕組みを作っていくべき。

E　委員

・各分野でいろいろな課題や問題があると思った。これからどうやって整理していくか難しいが、それぞれの分野でそれぞれ抱えている問題があって、点の状態を線とか面にしていきたい。
・若い人のアイディアや独創的な発想があるので、意見を聞いてみたい。10 年後のあるべき姿を検討する上では、これから先に立っていく若い人たちの意見を取り入れたい。
・人口が減っていく中で、他から見て鶴岡でなければないこと、同じことをやっていてはダメだと思うので、差別化になるような取組を、関連するところで一緒になって出来ればと感じている。

A委員長

・産業という分野なので、可能なら事務局で試算してもいいかなと思うが、10 年後にどれくらいの所得が必要なのかと考えた時に、どれくらいの生産が必要なのかというのを計算できるのではないか。農業産出額 306 億で 180 億の所得を、認定農業者の目標 400 万で割ると何人になるのかというと 306 億では足りないという話になる。400 万を確保しなくても生きていくすべは、鶴岡にはどういうものがあるのか。所得が無ければ若い人は来ないというが、どのくらいの所得が必要で、そのためにはどのくらい生産する必要があるかは計算できる。そうすれば現状が確認できるし、目標をどうしたらいいのかが出てくるのではないか。
・今日の意見を踏まえて事務局から資料を作ってもらって、5 日の企画専門委員会の情報も加えた形で皆さんから見てもらい、その段階で気が付いたこと等を出していただきたい。